

よみがえりの社と祭りのころ

加藤隆久著

後進に道を示す
内容多彩な良書



著者の加藤隆久氏は、永年、神戸市・生田神社の宮司を務められ、今年、後進に道を譲られた。現在は、名誉宮司として氏子崇敬者の尊敬を集めてをられる。

この間、神道青年全国協議会会長、兵庫県神社庁長、神社本庁常務理事等を歴任され、平成二十二年五月には神社界最高の栄誉である神社本庁長老の称号を贈られた。

また氏は、神社神道の研究者としても高名で、「神道津和野教学の研究」で國學院大學より文学博士の学位を受けられ、長らく神戸女子大学教授を務められた。さらに、日本民俗芸能団

は文部科学大臣表彰を受けた。

本書は、近年、雑誌等に発表された随筆、論文、短歌、また講演録等を集めた二十冊目の著作集であるが、一読すると、内容の多彩さに驚かされる。それは、取りもなほさず加藤氏の活躍の場がいかに広範囲であるかをものがたっている。

内容の一端を紹介すると、鎮守の社と祭りに代表される神社神道の伝統に始まり、御自身が奉務され、阪神・淡路大震災の甚大な被害からみごとに蘇った生田神社、伊勢の神宮と式年遷宮の信仰等、神社神道に

に触れて神前に奏した国家安泰や世界平和祈願の祝詞等々、本書を構成する題材は実に枚挙にいとまがない。

とくに、表題にもなった「よみがえり」と「祭り」は、今日に加藤氏を語るとき、欠くことのできない重事である。

平成七年一月十七日未明、突如として起こった大地震は生田神社の拜殿を倒壊させた。想像を絶する光景に言葉も失ひ立ち尽くす中、加藤氏には、かつて同神社の宮司を務められた厳父・故鏖次郎翁の声が聞こえたといふ。この声に励まされた氏は、復興に向かってまさに八面六臂の活躍を遂げられ、神戸の震災復興の象徴として注目を浴びたのである。

日本大震災に際して、加藤氏がとりわけ真心の籠った対応をされ、本書にも東北被災地支援の記事が随所に見られるのも故なしとしな

い。最後に、学術論文について一言触れておきたい。一般に神武天皇東征の故事の儀礼化とされる熊野の那智の火祭が実は農業神事に由来することや、明治の招魂社創祀の濫觴となった幕末の招魂祭は福羽美静等が中心となって始められ、今日的神葬祭の淵源である幕末の津和野藩神葬祭復興運動に岡熊臣の心霊研究が深く影響してゐたことを、

何れも精緻に論証されてをられる。以上、筆者の思ひつくままに記したが、本書は、加藤隆久氏の多方面の活躍を彷彿させるのみならず、神道人としての模範を垂れ、私ども後進に進むべき道を示唆する良書である。一人でも多くの方に味読をお薦めして、紹介の責めを盡きたい。

（本体2600円、戎光祥出版刊。ブックス鎮守の社取扱書籍）

野那智大社と津和野教学にかかる学術論文、幅広い活動を伝へて余りある新聞記事・インタビュー抄録、折

り「よみがえりの社と祭り」のころ」を象徴するといへ、無辺の御神恩を辱むばかりである。

（本社本庁参事・瀬尾芳也）